

テレワークと「福祉のお菓子」が生み出す 新しい価値

コロナ禍で急速に広まったテレワークと働き方改革……。残業をなくしつつ、生産性向上をめざす企業のサポートをしている（株）ワーク・ライフバランスの社長・小室淑恵さんに、テレワークと「福祉のお菓子」の活用について、伺いました。

“新しい考え方を伝えるときには、肯定する事が大切”

（東光篤子、以下東光）小室さんが起業された2006年頃、私がいたIT業界では、Googleなどシリコンバレーの働き方が注目を浴びながらも、日本ではまだまだ「残業は美德」というのが実態でした。そんな時代にワーク・ライフ・バランスというコンセプトをどうやって浸透させていったのか、最初に伺いたいと思います。

（小室淑恵、以下小室）新しい考え方を伝える時に、相手の価値観を無理に変えるのではなく、当時はその働き方が正しかったということを、肯定することが大事だと思っています。1960～90年代は、若者が多く高齢者は少ない人口構造で、人件費も安く、同じ物を均一に大量生産するには長時間労働が本当に有効な手段でした。そうやって今の日本の土台ができたことは事実ですので、まずはしっかり確認し合います。では、なぜ働き方改革が必要かといえば、今は人口構造が変わり少子高齢社会による「人口オーナス期」。男性の長時間労働では社会が成り立たなくなり、いかに男女や、障がいのある人、定年を超えた人など多様な人が働けて、労働力と社会保障の担い手になれるかが重要になってきた。そこで、ビジネスも市場も背景が変わったのだから働き方を変えましょう、と丁寧に話をしています。

それを踏まえ、少ない労働力で短い時間で成果を出すためにはどうしたらいいのか。男女ともにフル活用し、短時間で多様なチームで仕事をするとイノベーションが起き、生産性が向上するということがわかります。もちろん受け入れられない時期もありましたが、サステナブルな社会に発展させ、次の世代にいい日本を残すためには、スピーディーに働き方を変える必要があると訴え続けました。今では経営者の意識の変化も加速したかなと思っています。

“今働き方を変えてよかったという実感を経営者自身が持たないといけない”



小室淑恵 株式会社ワーク・ライフバランス代表取締役社長
2006年、株式会社ワーク・ライフバランスを設立。多数の企業・自治体などに働き方改革コンサルティングを提供し、残業削減と業績向上の両立、従業員出生率の向上など多くの成果を出している。多数の著書を執筆。日経ウーマン・オブ・ザ・イヤー2004受賞。2014年5月ベストマザー賞（経済部門）受賞。

株式会社ワーク・ライフバランス（<https://work-life-b.co.jp>）
1000社以上の「働き方改革」を成功に導いてきたコンサルティング会社。働き方改革や女性活躍推進に関するコンサルティングをはじめ、改善するためのツールのご紹介、講演、研修、養成講座、セミナーなどを全国各地で行う。



東光篤子 sweet heart project 実行委員長
大学卒業後、NTT関連企業に就職。広報宣伝業務に従事。その後、外資系IT企業に転職。子育てが一段落したのを機に（社福）木下財団に勤務。在職中にsweet heart projectを立ち上げる。

sweet heart project（<https://sweet-hearts.org>） 発足のきっかけは、木下財団の助成事業で訪問している障がい者支援施設の方との対話やアンケートでした。その時に、全国平均約160円/時間だった障がい者の方々の工賃がコロナの影響で50円まで落ち込んでしまったところもあるという悲痛な現状を知りました。とにかくできることを始めようと、財団のサポートを受けながら独立した形で、福祉のお菓子を応援するプロジェクトを2020年11月にスタートさせました。プロジェクトでは、パティシエなど様々な専門家の協力をいただきながら、美味しさや商品力を継続的に高めたり、原価を下げるために共同で材料を仕入れたりする仕組み作りに取り組み、また福祉のお菓子の素晴らしさを伝える活動をしています。小室淑恵さんに経営者向けのオンライン会議でのお菓子をご採用いただき、その参加企業へとsweet heartの輪が次々と広がっています。

（東光）コロナ禍で急速にテレワークが進展しています。その影響は如何でしょうか？

（小室）テレワークで新しい価値観になった部分は大きいですね。例えば、子育てで短時間勤務だった女性たちが、テレワークによってフルタイムに戻りました。通勤時間がなくなった結果、3か月くらい労働時間が追加されたのです。働く時間や場所に徹底的にこだわりをなくせば、もっと能力も意欲もある人の活躍を引き出すことができます。かつてのルールに無意識のうちに縛られていた経営者も、その価値に気づいたと思います。ただ、コロナが終息すると後戻りする可能性があります。だからこそ、今働き方を変えてよかったという実感を経営者自身が持たないといけません。社員がテレワークを進めても、経営者だけは相変わらず出勤していることも（笑）。経営者自身が出社せず、DX（デジタル・トランスフォーメーション）を活用すべきです。

“オンライン会議でともに食べるお菓子には、ただのお菓子ではもったいない”

（東光）そうした経営者向けのオンライン会議で、私どものプロジェクトのお菓子を採用いただき、参加者と一緒に食べて下さいましたね。

（小室）経営者の皆様にオンラインで集まっていたいただき、働き方の意識を変えていきたいと思いますという会議でした。福祉も、経営者の方は普段はあまり視野に入っていない話題です。企業が利益をより追求する場合、雇用数を少なくして一人に長時間労働させます。ただ、長時間労働で育児に参画しない夫がパートナーでは、家庭なんか持てないと女性たちが不安に思ったことが、この国の少子化につながったわけです。企業が利益ばかり追求する選択をし続けたら国ごと沈むし、企業も一緒に沈みます。だからこそ経営者として違う選択をしましょうということを訴えるような会議だったのです。そんな時は、ネットでいくらでも買える、ただのお菓子ではもったいない。しっかりと社会に思いを馳せながら自分たちのミッションも考えていきたい、そういう会議のコンセプトには、同じように社会を変えていくプロジェクトに取り組んでいるsweet heart projectのお菓子がぴったりでした。それは大きな付加価値です。



障がい者支援施設調布を耕す会での遠藤泰介パティシエによるブルドネージュ作りの講習風景

木下財団の創立者の木下茂は、㈱木下産商を創立し、日本最大級の鉄鉱石輸入商社へと急成長させました。戦後日本の復興に邁進するとともに、「支援を必要とする人を助けたい」という想いから、昭和37年、最初は貧しい地域の方々のための無料の病院を設立、昭和56年に助成事業に転換、以来、木下財団は、障がい者支援施設への助成を続けています。そうしたなかで、施設の皆様がコロナ禍で大変な思いをされている現状を目にし、声を聞き、財団の職員でもある東光さんが「私にも出来ることがある」と、色々な専門家の皆様にご協力いただきながら、「sweet heart project」を立ち上げ、障がい者支援施設のお菓子作り、販売のサポートを始めました。

職員が財団の枠を超えて、外部の皆様と連携し社会課題に取り組む事業を立ち上げた事を大変喜ばしく思います。財団とは独立したプロジェクトですが、木下財団の主旨とも合致しておりますし、迷うことなく役員とともに全員一致でサポートを決めました。サステナブルな仕組みになるよう、応援していきたいと思っています。

まだ始まったばかりで、足元を照らす光は小さなひかりかもしれませんが、その小さなひかりは未来を照らし出します。

社会福祉法人木下財団 理事長 大久保政彦



障がい者によるアートとお菓子のコラボレーション

“新しい価値を考え生み出す、そんな時にこそ”

(東光) その後、参加企業の皆様もお菓子を採用下さって、sweet heartの輪が広がっています。

(小室) sweet heart projectが届けてくれる福祉のお菓子はどれも美味しく、特に新作のブルドネージュは群を抜いていますね。コロナ禍の中で、どうしても支援にも優先順位をつけなければならず、福祉にしわ寄せがきていると感じますし、その意味でも大切なことです。でも、それだけじゃない。このプロジェクトは新しい時流をとらえていると思います。今はコロナ禍でとにかく会えない。企業は、会えない中で同じ時間を共にするというにみんな飢えています。オンラインでつなげば同じ時間を共にできますが、その同じ時間を過ごしていることを何かで表現したくて、同じ食事を全員の家に届けてもらい一緒に食事しながらオンラインで集まるなど、各社すごく工夫を凝らしています。さらにそこに社会貢献できる何かがあったら、よりよい時間を過ごせます。sweet heart projectのサービス、コンセプトは、新しい価値を考え生み出す、そんな時に本当にぴったりで、探していたサービスに出逢ったという感じでした。それが福祉で作っているお菓子だったんですね。それこそ、私が求めている価値の1つでした。このように価値のあるもの、こうしたものが新たに必要じゃないですかと企業に対しても積極的に提案してほしいですね。

(東光) はい、頑張って広げて参ります。貴重なお話をありがとうございました。

sweet heart project 実行委員会 <https://sweet-hearts.org>

事務局

東京都中央区入船3-2-7-6F (木下財団内)

info@sweet-hearts.org 03-6222-8927

実行委員長

東光篤子 木下財団

実行委員

石坂典子	石坂産業株式会社代表取締役
梅若幸子	Umewaka International代表取締役
遠藤泰介	パティスリーカメラ銀座
大久保公人	One Young World Japan Committee 理事長
大山泰	オウケイウェイヴ総研所長 (元フジテレビ経済担当解説委員)
片岡秀太郎	木下財団
倉島紀子	株式会社アー・マン・インク 代表取締役
篠根肇	セレス代表取締役
嶋沢裕志	元日本経済新聞社編集委員
中島隆	朝日新聞社編集委員
ホシカワミナコ	フリーランスエディター・ライター
安井孝之	Gemba Lab代表取締役 (元朝日新聞編集委員)
与謝野信	ロスジェネ支援団体パラダイムシフト代表
吉村信昭	グッゲンハイムパートナーズ代表取締役
渡辺秀人	渡辺広報事務所代表取締役

アドバイザー

大野伸	日本テレビ報道局統括プロデューサー
牧野義司	メディアオフィス時代刺激人代表 (元ロイター日本語版編集長)
松岡健夫	産経新聞経済本部編集委員
山見博康	山見インテグレーター代表取締役、企業価値協会理事
渡部道雄	共同通信社 編集局 囲碁・将棋チーム編集長

パートナー

社会福祉法人 木下財団
一般社団法人 Arts and Creative Mind (ACM Gallery)
一般社団法人 AOAart
株式会社トブコン

お問い合わせは < info@sweet-hearts.org > まで

sweet heart project 実行委員会

<https://sweet-hearts.org/>